Akita University

研究報告：秋田大学保健学専攻紀要20(1)：59－67，2012

本学の助産所実習における実習記録からみた助産師学生の学び

篠　原　ひとみ　　吉　田　倫　子　　成　田　好　美
兒　玉　英　也

要　　旨

本学における助産所実習の学びを明らかにするために助産師学生４名の実習記録から学びの内容を抽出し，KJ 法に準じて分析した．その結果，ラベルは150抽出され，下位カテゴリー43，中位カテゴリー17であり，上位カテゴリーは，【助産師の技術】，【助産師の診断方法】，【効果的な保健指導】，【知識と振り返りの重要性】，【母乳育児支援】，【開業助産師の役割】の６カテゴリーであった．これらの内容は，助産所実習の目的である，開業助産師の援助のあり方を理解すること，及び助産所における助産師の活動・役割を学ぶことに相応することから，目的は概ね達成できていた．助産師の役割は，＜妊娠期からの体づくり＞を支援し，＜主体性を支え＞，＜その人らしい分娩にむけた援助＞を行うとともに，＜家族への支援＞や＜仲間づくり＞であると学び，助産師としてのアイデンティティの形成に重要な役割を果たしていた．

Ⅰ．はじめに

平成23年，保健師助産師看護師学校養成所指定規則の一部を改正する省令が交付され，保健師及び助産師の基礎教育における修業年限が「６か月以上」から「１年以上」に延長された．そして，看護教育の内容と方法に関する検討会第一次報告（厚生労働省）で，助産師に求められる役割と機能として，妊婦健康診査時の正常・異常の判別だけでなく分娩時の緊急事態への対応，より高い助産診断能力と医師との連携，出産年齢の高齢化によるハイリスク妊産婦の増加に対する妊娠・産褥期の生活支援，女性の性に関わる支援が挙げられ，助産師教育の変革が求められている．しかしながら４年間の限られた大学教育では時間数に限界があり[1]，上記の提言に沿った助産師教育を実践するには，かなりの困難がある．このことは，近年，大学院や専攻科にて助産師教育を行う大学が徐々に増加している背景にもなっている．

このような状況の中，本学は平成15年度より助産師教育を開始し，毎年授業内容や実習の見直しをしながら現在に至っている．助産師養成において実習は重要な位置を占める[2]が，指定規則に「実習中，分娩の取扱いについては助産師又は医師の監督の下に学生１人につき10回程度行わせること」と定められているため，これまでの実習は，分娩介助例数の確保にエネルギーが注がれてきた[2]という報告もあるように，分娩介助が中心でそれ以外の妊娠期や産褥期のケアが不十分なままに終了する場合も少なくない．しかし，助産師の役割は妊娠期から産褥期までのケアや虐待防止を含む育児支援，女性の健康支援など多岐にわたることから，分娩学習に留まらない様々な経験ができる実習環境が望まれる．そのため本学は，「地域で開業している助産師に触れることで助産師の役割を広く学ぶこと」を目的とし，平成19年度（２期生）より２週間の助産所実習を実施してきた．そして学生は助産所実習で多くの学びを得て，次の分娩介助実習に活かしているが，その内容を十分には分析できていない．助産所実習の学びについては，継続事例実習を助産院で実施した経

秋田大学大学院医学系研究科保健学専攻

Key Words:　助産所実習
助産師学生
実習記録
学び

Akita University

験からの学び[3]や助産所での分娩介助実習における学び[4]があり，開業助産師のもつ知識や技術の学びが助産師としてのアイデンティティの形成に役立つことが報告されている．しかし，助産所それぞれに特色があることから学びの内容にも違いがあると考えられる．そこで，分娩介助だけに限らず，妊娠期から産褥期さらに育児期まで，助産師と共に援助を行う中での学生の学びを明らかにすることは，助産師教育における実習のさらなる充実を目指す上で重要と考え，本研究を行った．

Ⅱ．助産所実習の概要

助産学実習の施設は，A助産所，市内の総合病院，秋田大学医学部附属病院の３か所であり，最初に助産所実習を行う．この実習は４年次の８月に行い，２名を１グループとする２週間の宿泊実習である．助産師の指導のもと助産所のケアに参加し，分娩があれば助産師とともに介助を行い，助産所の掃除や洗濯，食事準備なども助産師と一緒に行う．A助産所は首都圏から電車で1.5時間ほど離れた住宅地に位置し，１か月の分娩件数約10件，病床数３床の施設である．30年～40年の臨床経験をもつ助産師が２人で経営し，数名の非常勤助産師が勤務している．実習前に学生は，周産期の技術演習（妊婦健康診査，胎児心拍モニタリング装着，内診，一時的導尿，仰臥位及びフリースタイルの分娩介助法，新生児の全身観察と計測，沐浴，産褥期の保健指導）を行い，助産所の管理について開業助産師より講義を受けている．

Ⅲ．研究方法

１．研究参加者

本学看護学専攻４年次生のうち助産師国家試験受験資格を得る予定の学生４名．

２．データ収集方法

助産所実習中（平成23年８月１日～26日）の「実習記録」(計画と実施，学び／気づきを記述したもの)から「学んだ」,「理解した」,「気づいた」と記述している文章を抽出した．学生は実習期間中，１日に１枚「実習記録」を記述し，２週間の実習終了後担当教員に提出する．

３．分析方法

データはKJ法におけるグループ分けの手法を使った．抽出した文章は意味のある一文にしてラベルとした．類似した内容のラベルを集めグループごとに編成し，それらの意味の本質を一文で表現した．そして同様の編成を３回行い下位カテゴリー，中位カテゴリー，上位カテゴリーとした．分析は助産教育担当教員３名が行った．各自が抽出したラベルを照合し，その後のグループ編成とカテゴリー名の作成は３人で行い，信頼性と妥当性が高められるよう意見が一致するまで話し合いを重ねた．カテゴリー間の関係については最終的に得られた上位カテゴリーの意味上の関係性に注目して図式化した．

４．倫理的配慮

助産所実習後の学内カンファレンスを終えた後，研究目的，方法，倫理的配慮について口頭と文章を用いて学生に説明した．研究協力は自由意志であり，研究に参加しないことで成績への影響は全く無いこと，記載された内容はデータとして取り扱い匿名性が確保されること，分析結果を確認できること，研究協力に同意後も撤回できることを説明し，了承を得た．

Ⅳ．結　　果

ラベルは150抽出され，下位カテゴリー43，中位カテゴリー17，上位カテゴリーは６であった（表１）．以下にカテゴリーの内容と上位カテゴリー間の関係性(図１）について述べる．ラベルは「　」，下位カテゴリー＜　＞，中位カテゴリー≪　≫，上位カテゴリー【　】で示す．

１．【助産師の技術】

このカテゴリーは≪妊婦健診技術≫，≪分娩期の援助技術≫，≪母乳育児の援助技術≫で構成された．

１）≪妊婦健診技術≫

学生は，助産師に実際に手を添えてもらいながら健診を行う中から，「妊娠中期は触知しやすい肩部分を捉えて胎向を判断する」,「中指薬指から手掌全体で児背のラインを触れる」などの＜レオポルド触診法の手技＞や，「小指全体を使って子宮底を押す」,「子宮底の最高点は子宮が球形であることを意識する」という＜子宮底長測定の手技＞，そして＜ドップラーによる児心音聴取方法＞では「プローブの角度を変化させ最良聴取部位を探す」ことを記述していた．

２）≪分娩期の援助技術≫

助産所は正期産に分娩介助が限られるため，妊娠37週以降は積極的に分娩に向けたケアを行い指

Akita University

表1　助産所実習における学び

上位カテゴリー	中位カテゴリー	下位カテゴリー
助産師の技術	妊婦健診技術	レオポルト触診法の手技 子宮底長測定の手技 ドップラーによる児心音聴取方法
	分娩期の援助技術	分娩の進行を促す方法 産痛緩和方法 分娩介助技術
	母乳育児の援助技術	乳房マッサージの手技 直接授乳の援助方法
助産師の診断方法	五感を使い経過を捉える	五感を使って観察する 経過を捉える
	分娩進行の判断方法	全身状態から分娩進行を判断する 局所の状態から分娩時期を判断する
	予測を観察やケアに活かす	予測しながら観察する 予測をケアに活かす
効果的な保健指導	対象に合わせた指導	個別性のある指導 具体的な指導
	意識の変化を促す指導	変化が必要な根拠を伝える 異常時の変化を知らせる
知識と振り返りの重要性	知識の重要性	基礎知識の重要性 既存の知識の再確認
	実践後の振り返りの重要性	振り返りで不備な点を知る 振り返りが学びを深める
母乳育児支援	妊娠期から卒乳までの母乳育児支援	妊娠期からの母乳育児支援 入院中の母乳育児支援 卒乳ケアの意義と方法
	母乳と児の密接な関係	児の状態から母乳育児の良否を判断する 母乳で育つ児の特徴
	母親の気持ちを支える援助	具体的な授乳指導 肯定的な言葉かけ 母親の気持ちを支える
	母乳育児の知識	母親の全身状態と母乳との関係 母乳の観察方法
開業助産師の役割	助産師の役割	妊娠期からの体づくり 主体性を支える その人らしい出産に向けた援助 家族への支援 仲間づくり
	安全に向けた取り組み	命を預かる職業 リスクを予測した対応 嘱託医との良好な関係 間接介助者の役割
	助産所の特徴と役割	対象の健康意識が高い 母親の心のよりどころ

導している．＜分娩の進行を促す方法＞として「お灸によるツボ刺激」や「床拭きや草取りによるスクワットの姿勢」が分娩開始を促すことや，分娩第一期から産婦に付き添う中で，「分娩の進行に合わせて体位の変換を促す」ことを記述していた．＜産痛緩和方法＞では，「声かけをしながら呼吸を整える」，「腕や足を握り安心させていく」，「有効な努責を促す声かけ」の記述があり，＜分娩介助技術＞では「臍帯巻絡の確認の時は指先を屈曲させる」，「児頭娩出時の左手は後頭結節が恥骨弓下を滑脱するまで押さえる」ことを記述していた．

Akita University

3）≪母乳育児の援助技術≫

＜乳房マッサージの手技＞では「親指と人差し指のあて方」,「しこりの取り方」「乳管開通の方法」を記述していた．＜直接授乳の援助方法＞では,「添え乳の際のポジショニング」や入院中は「授乳のタイミングで訪室し抱き方や吸着をチェックする」ことを記述していた．

2．【助産師の診断方法】

このカテゴリーは，≪五感を使い経過を捉える≫，≪分娩進行の判断方法≫，≪予測を観察やケアに活かす≫から構成された．

1）≪五感を使い経過を捉える≫

妊婦健診時に「妊婦の足を触れて冷えを知る」,「手で触って陣痛を観察する」,「少しの変化は五感を使った観察から気づく」など＜五感を使って観察する＞ことを記述していた．また，＜経過を捉える＞では,「今回の健診時の計測値だけでなく前回の値と比較し経過を捉える」こと，妊婦健診でも分娩期の観察でも「経過としてどうかを意識して現状を捉える」ことを記述していた．

2）≪分娩進行の判断方法≫

＜全身状態から分娩進行を判断する＞では,「全身状態の変化に伴い子宮口が開大し児頭が下降する」,「息遣い，表情，発汗，身体のこわばりなどすべての情報を統合し産婦の体に耳を傾ける」ことを記述していた．＜局所の状態から分娩時期を判断する＞では,「児心音聴取部位の変化から児頭の下降度を判断する」,「分娩室に入る時期はそれまでの経過，努責感の有無，陣痛間隔を合わせて判断する」,「介助の準備時期は陣痛発作時の肛門抵抗感，血性分泌量，肛門のし開で判断する」ことを記述していた．

3）≪予測を観察やケアに活かす≫

学生は,「予測しながら観察することで異常兆候に気付きやすい」,「児の体重の増減は哺乳状況と母乳分泌状態を関連づけ予測しながら経過をみる」，といった＜予測しながら観察する＞ことを記述していた．また,「内診の結果から分娩日を予測し，予定日より遅れる可能性がある場合は分娩を促す方法を指導する」,「乳頭白斑時や，乳房痛の時は乳管のつまりを予測してケアをする」といった＜予測をケアに活かす＞ことを記述していた．

3．【効果的な保健指導】

このカテゴリーは，≪対象に合わせた指導≫，≪意識の変化を促す指導≫から構成された．

1）≪対象に合わせた指導≫

＜個別性のある指導＞では,「ニーズを踏まえた指導を行うには対象の性格を見極める」こと,「対象に合った話し方や方法でないと受け入れられない」ことや「一人一人に時間をかけてじっくり関わる」ことを記述していた．また，＜具体的な指導＞では,「対象がイメージしやすい説明」を行い，説明後に「実際に行ってもらい修正する」助産師の姿から指導後の確認の重要性を記述していた．

2）≪意識の変化を促す指導≫

「体重コントロールの必要な妊婦になぜ行動変容が必要かを伝える」こと，乳腺炎の母親に食生活の内容を聞き,「母親の食事と母乳との関係を説明する」といった＜変化が必要な根拠を伝える＞ことや,「母乳の色や味を母親に知らせる」,「乳房ケア前後の児が飲む姿を（母親に）比較してもらう」といった＜異常時の変化を知らせる＞ことが対象の≪意識の変化を促す方法≫であると記述していた．

4．【知識と振り返りの重要性】

このカテゴリーは，≪知識の重要性≫，≪実践後の振り返りの重要性≫から構成された．

1）≪知識の重要性≫

「各期の看護に特に注意すべき知識を頭に入れておく」,「ベースとなる知識が必要である」など観察やケアを行う中で，＜基礎知識の重要性＞を感じていた．そして「子宮口は分娩が近づくにつれて徐々に開き軟化していく」,「排臨前は児心音が低下しやすい」,「直接授乳にはポジショニング，ラッチオン，頻回授乳が重要である」,「出生体重が重いほど体重減少率は大きくなる」,「吸啜刺激により子宮収縮，乳汁産生，分泌が促される」など＜既存の知識の確認＞を行っていた．

2）≪実践後の振り返りの重要性≫

「助産師と一緒に分娩を振り返り，不備な点を確認した」ことで，＜振り返りで不備な点を知る＞ことができていた．そして，そのことにより「経験はじっくり振り返ることで得られる」ことから

Akita University

＜振り返りが学びを深める＞と考え，記述していた．

5．【母乳育児支援】

このカテゴリーは，≪妊娠期から卒乳までの母乳育児支援≫，≪母乳と児の密接な関係≫，≪母親の気持ちを支える援助≫，≪母乳育児の知識≫で構成された．

1）≪妊娠期から卒乳までの母乳育児支援≫

「妊娠中から乳房のタイプや乳房の変化を観察する」ことや，正常な妊娠経過であれば「妊娠中から産後の乳房を見極め必要なマッサージや刺激を与える」など＜妊娠中からの母乳育児支援＞について記述していた．＜入院中の母乳育児支援＞では，「入院中の指導や乳房ケアは産後一週間後，一ヶ月後の直接授乳に大きく影響する」ことから「出生直後の授乳時に児の吸啜反射や飲み方の癖を把握する」，「母子に適した授乳方法を入院中に体得する」ことの重要性を記述していた．＜卒乳ケアの意義と方法＞では，「段階を踏んで行う」こと，「卒乳まで乳房トラブルを起こさないように進める」こと，「母親が意識して取り組むことが重要」であり，卒乳は「親子のコミュニケーションの一つであるふれあいの終わりである」ため，「子が卒乳に向けて心の整理ができるように期間を作る」ことを記述していた．

2）≪母乳と児の密接な関係≫

「母乳を良く飲めているかの指標として児の便の色や性状に注目する」，「児の体重増加は哺乳状況の指標となる」，「児の泣く回数の減少から分泌量の変化を知る」など，＜児の状態から母乳育児の良否を判断する＞ことを記述していた．また，完全母乳育児の場合「児の体重が増え，その後代謝が良くなり排泄回数が増える」，「母乳分泌量が増えるに従い，濃縮尿から黄色，黄色から透明な尿に変化する」という＜母乳で育つ児の特徴＞を記述していた．

3）≪母親の気持ちを支える援助≫

「授乳の実際を観察し修正点を提案する」，「具体的に説明する」など直接授乳に向けた＜具体的な授乳指導＞を行うとともに「否定的なことは言わない」，「できている所を伝える」，「対象の取り組みを称賛する」といった＜肯定的な言葉かけ＞が重要であることを記述していた．そしてこれらの援助に加えて，「支持的で，母親の気持ちに寄り添う」こと，「母乳があげられない母親のつらい気持ちに共感する姿勢」といった＜母親の気持ちを支える＞ことを記述していた．

4）≪母乳育児支援の知識≫

＜母親の全身状態と母乳との関係＞では，褥婦の食事を準備する中で，褥婦の母乳分泌量に合わせて食事量を変化させていることを知り，「母親の食事と母乳は密接に関係している」こと，乳房痛を訴える母親に対して，身体の冷えや食事内容の指導を行う助産師の姿から「乳房トラブルが全身から引き起こる（乳房が身体の危険サインの発現部位となっている）」ことを記述していた．また＜母乳の観察方法＞では，哺乳量は「乳管開通の本数より一本一本の乳管からの分泌量に着目する」こと，「母乳の色や性状，味を観察する」ことを記述していた．

6．【開業助産師の役割】

このカテゴリーは，≪助産師の役割≫，≪安全に向けた取り組み≫，≪助産所の特徴と役割≫から構成された．

1）≪助産師の役割≫

「妊娠期から出産，育児にむけた体づくりをサポートする」ために，マタニティビクス，ウォーキング，お灸教室，床拭きなど「妊婦自身が出産に向けて心と体を準備するための機会を提供する」助産師の姿から＜妊娠期からの体づくり＞が助産師の役割であると記述していた．＜主体性を支える＞では，満足のいくお産に向けて草取りや床拭きを熱心に行う妊婦の姿から，「自分らしいお産，満足のいくお産をするためにできることをやろうとする姿勢を導き支える」こと，「対象の主体性を尊重して産む力を最大限に引き出す」ことが助産師の役割であると記述していた．＜その人らしい出産に向けた援助＞では，「産婦の身体的生理的側面に加えて，人柄や性格などの内面も把握して分娩をサポートする」ことを記述していた．＜家族への支援＞では，分娩時「立ち会う家族に分娩予測を伝えて安心感を与え，信頼感を得る」こと，妊娠期から上の子どもが一緒にエコーを見たり，分娩に立ち会う中で児を自然に受け入れる姿を見学し，「家族の形を作ることも助産師の役割である」と記述していた．＜仲間づくり＞では，助産師は「妊婦同士の横のつながりを作る」役割を担い，「母親同士の繋がりは心の負担を軽減し

Akita University

育児を楽しむためには欠かせない」ため，妊娠期からウォーキング，マタニティビクスなどの活動をとおして「仲間で安全，安楽な妊娠出産育児への意識を高め合う機会を作る」ことを記述していた．

2）≪安全に向けた取り組み≫

臍帯巻絡のため第一呼吸に時間がかかった事例を経験し，「分娩は感動の裏に常に生命への危険のリスクがある」ことから，助産師は＜命を預かる職業＞であることを実感していた．そして，助産所では医療行為ができないことから，「リスクや影響因子に気づき新生児や母親の命を守る」こと，「状況に合わせた臨機応変な対応」が必要であり，「自宅分娩希望者には緊急時に備えてシミュレーションを行う」，「新生児蘇生法の講習に参加し，常に新しい知識を習得する」助産師の姿から，常に＜リスクを予測した対応＞の重要性を感じていた．また，嘱託医とのカンファレンスに参加し「助産師と嘱託医が互いの考えを理解し尊重し合っている」こと，「安全な分娩に向けた医療機関との連携」を知り，＜嘱託医との良好な関係＞が助産所には欠かせないと感じていた．＜間接介助者の役割＞では，助産所では分娩には必ず２人の助産師が携わり，何かあればすぐに対応できる体制を整えている．学生は分娩時に間接介助者として関わる中で，「直接介助者が分娩に集中することができる適切なサポート」に向けて「先を見越して動く」ことを記述し，その役割が安全な分娩に重要であると実感していた．

3）≪助産所の特徴と役割≫

「助産所で出産をする人はもともと健康意識が高い」人が多く，「出産に向けて体づくりに励んでいる妊婦が多い」ことを実感していた．そして，助産所は「個別性を大切にし，その人らしさを引き出す場所」であり，「退院後も乳房ケアを求めて気軽に来ることができる場所」，「何かあれば気軽に相談できる場所」であり，＜母親の心のよりどころ＞として存在していると記述していた．

7．上位カテゴリー間の関係性（図１）

６カテゴリーの関係は，【助産師の技術】，【助産師の診断方法】，【効果的な保健指導】が横並びにあり，【母乳育児支援】はこれら３つカテゴリーを基礎として行うことから，その上に位置し，【開業助産師の役割】は上記４カテゴリーを要素としており，階層的関係である．また【知識と振り返りの重要性】は【開業助産師の役割】を除く４カテゴリーに影響するため矢印で示した．

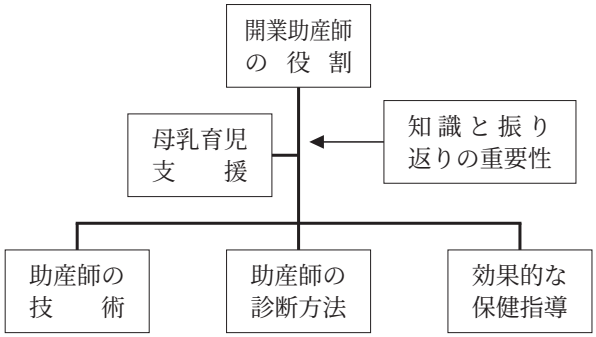

図１　学生の学びの上位カテゴリー間の関係性

Ⅴ．考　　察

平成23年度の助産所実習における分娩介助例数は10例であり，学生１名につき２～３例の介助を実施していた．分娩があれば１名は直接介助を行い，もう１名は間接介助を行うため，分娩期の援助は学生１人につき５例を経験したことになる．それに加えて外来での妊婦健診や入院中の母子のケアにも携わることや，助産所という初めての環境に慣れる必要もあり，この２週間は学生にとって体力的にも精神的にもかなり厳しい環境にある．しかし，助産所に24時間泊り込み，助産師とともに妊娠期から産褥期まで継続して関わるという環境が学生に多くの学びを与えたと考えられる．

１．助産所実習の目的と学びとの関係

学生が学んだ６つの上位カテゴリーは，【助産師の技術】，【助産師の診断方法】，【効果的な保健指導】，【知識と振り返りの重要性】，【母乳育児支援】，【開業助産師の役割】であった．本学の助産所実習の目的は，①開業助産師の援助のあり方が理解できる，②フリースタイル分娩の介助方法を学ぶ，③助産所における助産師の活動・役割を学ぶ，の３点であり，目的に合わせて学生の学びを考察した．

1）「開業助産師の援助のあり方を理解する」について

この目的については【助産師の技術】，【助産師の診断方法】，【効果的な保健指導】，【母乳育児支援】が相当する．実習前の演習で妊婦健診技術や分娩介助法は行っているが，分娩介助後に「演習はあくまでつもりで身についていない」との記述があり，演習と実践の違いを感じ，実際に

Akita University

見て，触れて，感じて判断する中で，学生は学びを得ていた．【助産師の技術】では，レオポルド触診法における術者の手の使い方，分娩介助時の手の使い方，そして乳房マッサージの手技など熟練助産師に実際に手を添えてもらいながら，頭ではなく感覚を通して学んでいた．【助産師の診断方法】では，＜五感を使って観察する＞，＜全身状態から分娩進行を判断する＞ことを学び，このことは助産師が診断する上で非常に重要な点である．同様のことが渡邊[4]の研究でも「五感を活用した判断技術」と表現されている．学生は産婦に継続して付き添う中で，表情や息遣い，発汗，身体のこわばり等から分娩の進行を判断すること，分娩監視装置による観察ではなく，自分の五感を使った観察の重要性を学んでいた．そして，観察して予測するのではなく＜予測しながら観察する＞こと，予測と違った時にその理由を考え，再度の観察やケアに活かすことを学んでいた．このことは異常兆候を発見する上で必要な視点であり，服部ら[5]の研究でも同様のことが報告されている．【効果的な保健指導】では，対象の性格や背景に合わせた＜個別性のある指導＞，＜変化が必要な根拠を伝える＞ことが対象の意識を変化させ，受け入れられる指導であることを学んでいた．ベテラン助産師のケアのあり方を「みて」，「感じて」，「一部参加して」学ぶ効果は大きく[6]，一人ひとりに時間をかけて丁寧に向き合う助産師の対応から個別性のある指導がどういうものか学ぶことができていた．【母乳育児支援】では＜妊娠期から母乳育児支援＞を行い，入院中に直接授乳が体得できる援助が退院後の母乳育児の継続に重要であること，直接授乳や母乳の良否を児の状態から判断すること，肯定的で具体的な指導や母親の気持ちを支えることが母乳育児支援であると学んでいた．母乳育児支援は助産師の重要な役割であるが，このことを実習で学ぶ機会は少なく，卒業後，研修会や勉強会に参加して学びを深める助産師が多い．特に退院後の母乳育児支援に関しては助産所実習でしか学ぶ機会がなく，貴重な学びができていたと考える．

2）「フリースタイル分娩の介助方法を学ぶ」について

この目的については，病院における仰臥位分娩の介助経験もなくフリースタイル分娩の介助を行ったために，フリースタイル分娩の介助法の手技に関する記述は見られず理解は不十分であったと考える．しかし，【助産師の技術】として≪分娩の進行を促す支援≫の中で，産婦の体位の重要性を学んでいた．そして，「フリースタイル分娩は産婦の主体性を尊重しつつ，安全・安楽の両方を加味してその上で産婦にとって最も良い姿勢で分娩すること」との記述から，ただ単に産婦の自由な体位に任せるだけではなく，助産師として分娩進行を見守り，付き添うことの重要性を学んでいた．

3）「助産所における助産師の活動・役割を学ぶ」について

この目的については，【開業助産師の役割】が相当する．助産師の役割は，＜妊娠期からの体づくり＞を支援し，対象が納得できるように＜主体性を支え＞て，＜その人らしい出産に向けた支援＞を行うことと捉え，＜家族への支援＞や，妊娠期から育児期にかけた＜仲間づくり＞の機会を作ることと学んでいた．そして開業助産師は，＜命を預かる職業＞であり，常に＜リスクを予想した対応＞に向けて＜嘱託医と良好な関係＞を作っていること，助産所は＜母親の心のよりどころ＞であり，母親を支える場所として存在していることを学んでいた．

以上のことから助産所実習の目的の①，③については概ね達成され，②については不十分であったと考えられる．分娩見学の機会もなくフリースタイル分娩の介助方法を学ぶには無理があったことから，今後は学生の学びに合わせた目的の修正が必要である．

また，学生が学んだ６つの上位カテゴリーのうち【知識と振り返りの重要性】は助産所実習の目的には相当しなかったが，助産師の診断や援助に知識は不可欠であり，重要なことはそれをどう活用するかである．柳原は「ケースの状況に合わせてどの知識をどのように用いるべきか，実態に則して知識をシャッフルして思考の再構築がなされる必要がある」[1]と述べている．助産学実習の最初に行う助産所実習では既存の知識を実践の場で確認する段階で，まだ実態に則した活用までは出来ていなかったと考えられる．実践後の振り返りについて，中島ら[7]は新人助産師の学生時代の分娩介助・継続事例実習を調査し，実習における分娩介助後の振り返りの重要性を指摘している．また，谷津[8]は指導者からのフィードバックを受けながら事例を振り返ることができる指導体制の重要性を述べている．助産所実習に教員は同行せず，振り返りは助産師と学生間で行う状況にあったが，

Akita University

分娩進行の判断方法や援助の不備な点を知ることはできていた．しかしながら，分娩介助記録は不十分であり，分娩介助の初期の段階にある学生にとって助産師が指摘する内容を十分に理解することが難しかったと思われる．今後は助産所実習における分娩介助の学びを深める方法を検討する必要がある．

２．助産学実習における助産所実習の位置づけと今後の課題

助産所実習を取り入れた理由は，助産師が何をする職業なのか，実践の中から学んでほしいと思い，そのためには助産師が独立して妊娠期から育児期まで援助している助産所実習が必要であると考えた．４年制大学で学ぶ学生は理想の助産師モデルに出会わないと助産師を将来の職業としない[9]といわれており，助産師になるというモチベーションを上げ，24時間体制の助産学実習を乗り切るには，理想とする助産師像を描く必要がある．助産所実習終了後のカンファレンスでは「目標とする助産師に出会えた」,「産む力を後押しできる助産師になりたい」との感想があり，学生はこの実習で，助産師の役割と責任の重さを学び，自分がなりたい助産師像を描くことができ，助産師としてのアイデンティティの形成を促す役割は果たせたと考えられる．本来ならば病院での分娩介助実習後に助産所実習を行い，助産学実習の総まとめの位置づけにするという考えもあるが，Ａ助産所は年間を通して学生が実習しており，実習時期も期間も限られ，最初に助産所実習を行わざるを得ない状況にある．しかし，最初に助産所実習を経験したことで，次の病院における分娩介助実習では産婦への対応が自然な形でできていることから，助産学実習の導入としても，学生のモチベーションを上げる意味においても，助産学実習の最初に行うことは意義があり貴重な実習である．

本研究において助産所実習は分娩介助だけでなく，妊娠期から産褥期の援助，母乳育児支援，助産師としてのアイデンティティ形成など多くの学びを得る実習として重要な役割を果たしていることが改めて明らかになった．大学院教育では６～８週間の助産所実習を行っているが４年制大学の教育では難しい．助産学実習の最後に，再度１週間程度の助産所実習を行うことができれば，最初の実習では解らなかったことが解り学びが深まると考える．本学は平成24年度よりカリキュラムを改正し，助産学実習の単位増加に伴い地域母子保健実習を追加した．この実習では行政の役割を学ぶだけではなく，地域で働く助産師の視点から母子保健を捉える目的で事前学習として助産所のある地域の母子保健を学び，開業助産師や出張助産師の視点から母子保健事業を捉える機会を作ることも今後検討していく必要がある．

Ⅵ．結　論

助産所実習における学生の学びは【助産師の技術】,【助産師の診断方法】,【効果的な保健指導】,【知識と振り返りの重要性】,【母乳育児支援】,【開業助産師の役割】の６カテゴリーであった．学生は24時間助産師とともにケアを行う中で，助産師の役割は出産や育児にむけた＜妊娠期からの体づくり＞を支援し，対象の＜主体性を支え＞，＜その人らしい分娩にむけた援助＞を行うとともに，＜家族への支援＞や＜仲間づくり＞であると学んでいた．そして助産所実習は助産師としてのアイデンティティ形成に重要な役割を果たしていた．

謝　辞

本研究にご協力下さいました助産師学生の皆様に深く感謝申し上げます．

文　献

1) 平澤美恵子：助産師教育の今　教育課程の変遷と現状をみつめて．助産雑誌64(12)：1048-1053，2010
2) 柳原真知子：臨床の場で，学生が助産師と共に経験事例を重ねていくことの意味．助産雑誌60(12)：1043-1047．2010
3) 子安恵子，安積陽子，吉田香奈子・他：長期に渡る助産院実習における助産学生の経験からの学び．神戸市看護大学紀要12：11-19．2008
4) 渡邊淳子：助産所での分娩介助実習における学び．日本ウーマンズヘルス学会誌９(1)59-66．2010
5) 服部律子，堀内寛子，谷口通英・他：本学における助産実習での学びの内容．岐阜県立大学紀要７(2)：3-8．2007
6) 毛利多恵子：達人が育つための条件．助産雑誌60(12)：1052-1055，2006
7) 中島久美子，國清恭子，阪本忍・他：新人助産師の視座から捉えた分娩介助・継続事例実習指導の課題．日本助産学会２(1)3．5-15，2009
8) 谷津裕子：分娩介助場面における助産師学生の熟練助産師からの学び．日本助産学会誌16(2)：46-55．2003
9) 加納尚美：専門家を育てるという意味と条件．助産雑誌60(12)：1033-1041，2006

Akita University

Contents of lessons learned by midwifery students during maternity home practice

Hitomi SHINOHARA Michiko YOSHIDA Yoshimi NARITA
Hideya KODAMA

Department of Maternity Child Nursing, Akita University Graduate School of Health Sciences

Lessons learned by 4 midwifery students during maternity home practice were analyzed from their practice records by K-J methods. As a result, 150 labeled sentences associated with lessons learned were classified into 43 low, 17 middle and 6 upper class categories, which were named as “Midwife techniques”, “Midwife diagnostic methods”, “Efficacy of health guidance”, “Importance of reconfirmation of knowledge”, “Supporting breastfeeding”, and “Role of midwife in practice”. These contents included required assignments from the practice, implying that students could understand the role and supporting methods of midwives in practice. The student learned that the role of the midwife was to support development of women’s physical condition during pregnancy, to support active delivery that women deserve, and to support women’s family and opportunities to make friendships. Thus, lessons learned in the maternity home are thought to contribute to the formation of their identity as midwifes.